



繪本右圖記五篇卷之十一

目錄

山東氏家系之活

山東氏祖秀吉と御手図

秀吉と馬船渡小田原活

馬船渡秀吉と難波と行方

秀吉と大軍夷小田原活

河内八代於秀吉と秀忠と大指物大母衣の圖

三宅至宝源小次郎助と付圖

山中城落成之活

繪本右圖記五篇卷之三

小説政治家系

小倅曰政事記
家は坂東七刀の太守相模國守乃城主少宗たるや草平、政と
之者あり乞う先祖を司ひ小擅爲天皇より七代の後胤肥前守
至維ね又代の源少條已節財政が本流相模次節財源と云者磨意
名譽の義後嵯峨帝の七宮と供侍猪城入道忠と奥羽下向の附
伴勢國安堵津津の浦玉と羅内又あひ經よ伴勢國よ蟄虫若々其義勇
子と遊む伴勢出生の児うじい伴勢少次節財長と名矣アセ其ニスバア
猪城伴勢九郎長兵とす豪傑アリ其府猪城の國守今川信満
ち主氏親もあて於官とめく立功をこそ猪豆國山の謀を守取
先主實正一年正月方義政の令官政知伴至國コト向伍部殿

後、辺勘兵房もる名の國
姫秀政智暗の國

姫秀の政智略の國

達政宗名參小國原語
參古事記之書
參古事記之書
參古事記之書

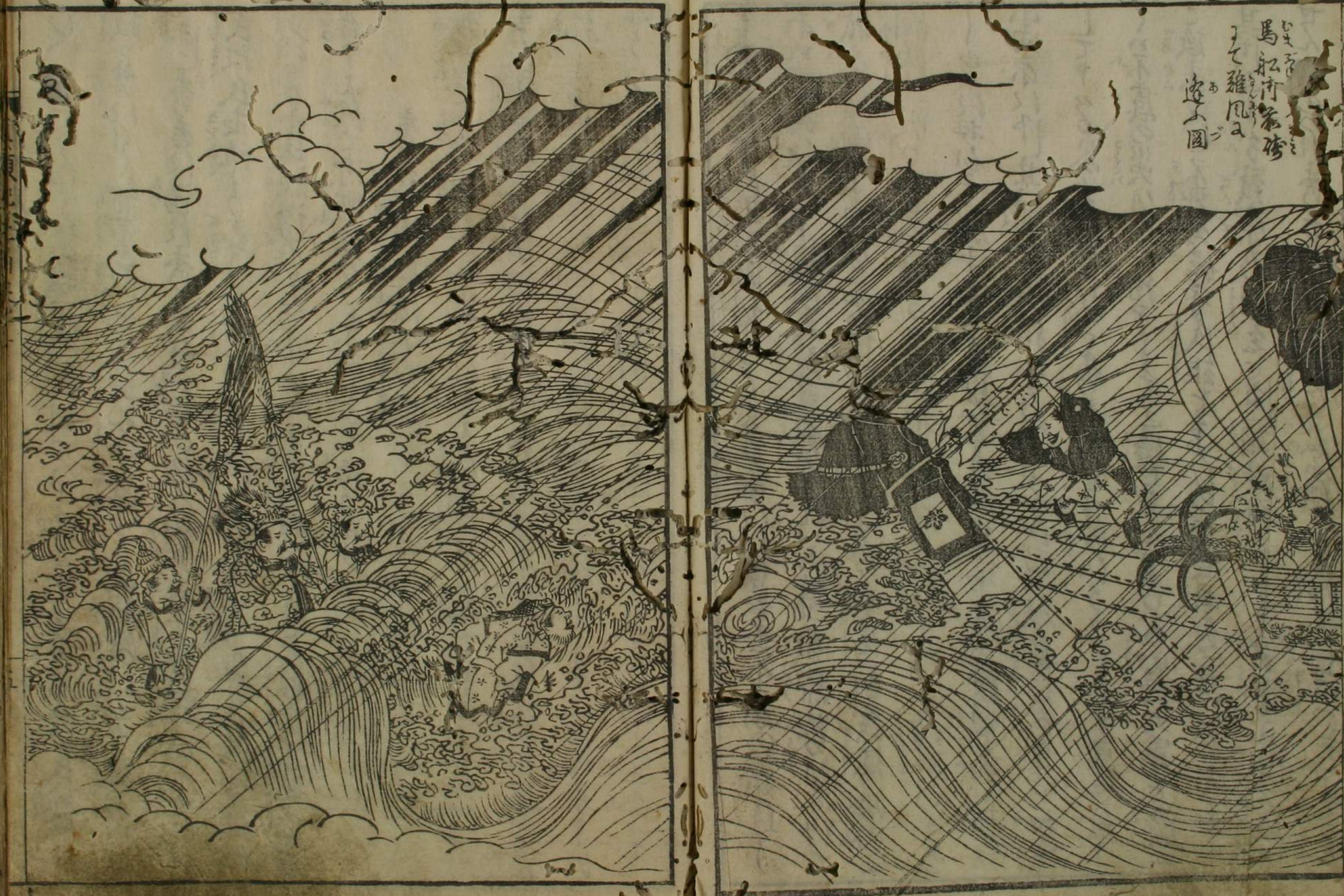
小田原の跡中軍を以て
小田原の跡中軍を以て

山東氏觀
李吉云
渴毛圖



在國三十一年明憲二年政知率去以降數朝九郎長氏
其重又累以征討を襲ひ討く終より勢を抑伏小條より更に因利發
志と小條單雲入るゝ号は曰九年相及を伐て小田原の城より侵入附
後拘束院永正十三年又憲在系をま氏綱と修み三浦入る遁す日荒
次郎義元と敵して朝鮮の城を拔は十六年八十八塞子を率ひす恩氏
綱の威勢盈んとして又が箕谷と終ぎ武名勝國又鳴ら其の子たる吉
ま氏康太文七年上故民解左彌憲政と義兄弟河誠又武ひ大功勝憲
政國と捨て城後又逃亡見に由りて氏康園東七百里也勢ひ同く
長之氏康元龜元年小山の城より其つまた系をま政當附小
國の城を其の子氏平と修み外國より要害を構へ威勢を震ふて敵て
王令に附れかと信長云母の府すり名命に處すと度り今櫻門一益
と公私度くに及び時ひくも不機長云不變の城遂う
あらせ絶ひ天下再び去れよ及びんべ小條一家、餘勢ひとひ山
伏を小雲すりひがるに附れし國を御るよ今度は武德海内よ
圓滑にゆきひがる者よりうかるふ狭小條のみ四つより津川のきる
一室にゆしく殿下安きじと名を天正十七年の秋假備と相即
小雲にし其の弟を夷將本元によく天正一族良後を隼羽ね清
い不虞の災ひあん珍よとそよ廢せどんべ秀吉が令ひてと廢せば恐
て政未だ不如夷將守氏組とあんのがせ二回秀吉の心をあんと
其内六十がれ難禁乃用をとほ一極款財ととも害易く味方敵
せんと秀吉が討多勢ひよ多くと上廢せば遂に天下と定

馬船御着物
三と羅風ス
遠よ圖



之に於ては衆議一改。氏親一人とあつて宣うるゝは氏親の氏政が守り、智勇兼徳の良知へ不回して氏親邊にまづ聚樂み集じ秀吉に渴に秀吉の甚歎び多ひ饗食懸力竭懇請を呈。且氏政氏直後より亟よと陪天子と辟く狀よ渴刃せしむと後後三ノ小氏就漢で先と令承。系泊圓つてして成政又年勅遂き。

前ヤと从て御駕送りつ東國こそゆうる

秀吉云馬船渡小田原

秋善て身も中旬よりされど、氏政又よと陪せ風靡に甚勢りた。且富田左近の監は因田西人を小田原へ降しと陪延引の罪と攻め。終は附民政の防禦の用を承全く。猶もさうられば何んぞア。氏政教や成功をみて國事ナシ圓す。既て王命を

萬如せば天下のる本害外の事也。候く今駕中の令せと發き上源せざるふれども立國を期と云と活えりを繕うのを若本圓七を國安堵の御教書。是れ御物うづぎよ奉と居仕は幕下よ屬り。よしとよ是によく富田は因の兩人と圓一と山瀬と秀吉云に言工仄秀吉云兵院と御教書を拂り少條に賜らんと云。當云故朝鮮強心病めマヤク又小憶民政れと矣す。其邊ひ先工廢は而後本領安堵の御教書をうえべきに已ハ國よ安坐して廢トの御教書と先邊てヤ。やさんと云語石野の行法よりてやまく。多ひ往ひ民政が心虚病く先と知れり急角よ奉よを上源と延引。さる又別と要す。構合兵の用意と云。狀よ歎辭せんが爲なり。

其後に上洛せば備後守安達の手に取られ
て民政を代へと達し其勢よき大軍をみて是を討へんか作
て密計を立て令さるを得んや端崩（そもくつ）一粒のびくわゆる秋掌の内
よりはるかにじうのよきと名されば兩人平伏して其慶幸を感ド
タハ根津教書小原家よ邊（へん）タルが民政をとりて本よ爰ひ立たれ
オ智彌良孔明より勝（かつ）とほゞがりちくり伏よは説（せつ）とまづ先ね根
の地（じ）山や志に箱根の夷嶺あり味方還卒（かえしゆく）と守らば秀吉
の軍（ぐん）にて向ふとも豈處（くわたり）也其と路程百里何ぞ
遙（とほ）け知て入松谷をほんと通して年月を歴うる内よひ没（ぼつ）は
摩（ま）リ山（さん）若年（わかどり）軍伍（ぐんご）の軍兵（ぐんへい）をして本國（ほんぐに）歸（かへ）り
名の御事（ごじ）よ發（は）義武（ぎぶ）にて迎候（むか）すを右とスモ如（ごとく）く
義武國（ぎぶくに）義武士（ぎぶしつ）大軍卒（だいぐんそつ）を廢（はい）よ一秀吉が屬（すく）せん難（な）きよ此
もさる云程（うてい）よ秀吉云（くわい）小原（おはら）と語せざるを傍（そば）り十日廿宵
を書（か）て因（いん）て之（そ）を之（そ）ケ來（くわら）の編（へん）曰（いわ）あづく松と飛鳥巣（とよのす）を犯
れ（はれ）て只馬耳（ただまじ）内（うち）桂（けい）のみのとくは流（はなれ）て居（ゐ）たるをひよりと餘
少（すくな）るを付（つ）て少（すくな）るを奉（まつさう）と兵糧（へいりょう）を引（ひ）まし御飯（ごはん）
軍兵（ぐんへい）を遣（し）し長束（ながし）太兵衛（たいへう）と兵糧（へいりょう）を引（ひ）まし御飯（ごはん）
せひく本二千万石之内（うち）よを集め船（ふな）又積（のづ）く駿河の江戸にあり
漕（こ）舟（ふな）並軍勢（ひきぐんせい）配（はい）せし又金二万枚（まい）をみて修繕尾張（しゆぜん）に備
強（さす）久國（くに）の根津（ねづ）一室小原家直邊（まつべん）よゆゑ且馬船六百艘（さぶらう）修葺（しゆき）の

三處（三處）の者を育て（育て）て、そのまゝ仍長年（長年）在る船を脯（脯）にすばりて、
其の者に色と聞（聞）、勧（勧）其の意（意）へ、嘗（嘗）とどく日限處（日限處）引是るきやうにと
至（至）ゆるがゆううなうたう財（財）馬船の船頭（船頭）をひそむれひるが遠及御不修（御不修）
す。うち船中（船中）の馬のうを物語（語）りしをす。うひのうと馬通異（異）は
て、船に種（種）不す。若湯（若湯）と馬の度（度）と制（制）う參（參）そり、船中（船中）よされ
み。尉（尉）急龍作（急龍作）の如（如）うと聲（聲）、至船被接（被接）て、船と度（度）とし、うきをけ
度（度）の馬船（馬船）停止後付（後付）られ、降（降）て御下（御下）是み、べきやとキタクスふれを
殿（殿）り、下（下）とよとる香（香）を乞うの船（船）と道（道）くをしゆる馬船の被船せん
みを等（等）くは、吾自ら陞（陞）り、書（書）て龍宮宣教（宣教）を達（達）風波の難（難）くねみ接
ふるが、其（其）心を用ひて、もやく船を彼地（彼地）とすとて
玄（玄）て酒（酒）の夢（夢）を憇（憇）よ曰（曰）

圓白秀（圓白秀）
度（度）小條遮（小條遮）、又船と吾馬船を相共三處（三處）のは、號（號）也

龍宮殿

御櫓（御櫓）されて船頭（船頭）より、船頭（船頭）の上（上）多（多）數（數）、樹の園の様（様）、龍宮
との御一族（一族）、ては、まひく、色いけ、く、御御（御御）、或と私（私）、と私（私）、と、多々、
今、車（車）と、ごとく、は、しや、御（御）、私（私）、て、羅風（羅風）よ、あひ、私（私）り、つとも、に、車の、藤
一、脣（脣）と、あく、も、殿（殿）の、脣（脣）、背（背）き離（離）と、私（私）を、かひ、を、ほ、なる、が、福、美
の、や、うるべ、今、車（車）、ま、御、感、光、へ、乗、よ、轡、せ、る、日、輪、の、お、と、行、り、の、
光、よ、み、向、り、ん、殿、下、の、御、財、され、わ、よ、海、と、乃、羅、み、ほ、よ、わ、あ、
衆、身、う、り、く、れ、と、よ、観、を、解、き、教、ま、の、私、ぐ、り、帆、圓、櫻



もて遠ノ羅を立トヨ不恩薄テ武威ヨ風雷電して向日
朝雲より覆リ其波船を傾ムと見モ指を附を拂ムと
龍波の御岸より彼歟トマク往シ而帆を蒙テ性ニ屈けと
遙を浪へ内一通を投ルバ風雨急ちばまう波浪穏ヨ如く私
急かく三波の波を避ヘ多是偶御波シヒツドモ軌の魚民
を愚昧ナリ私心が心を安んゼンガムヨケニ事をも外洋之私
張氣をモソルを向直まひ程ニヤ激浪止んで至る

き立リ

大軍攻小西

天正八年三月初日

大納言秀長

山陽守西九郎小西の軍勢を三千万金弱外ヨ勢尾二尺の勢二万又

金勢内大臣信雄卿引率

前赤の邊より先遣セテ後陣ハ毛尾鐵矢腰に兜毛利右馬

政照元に一万金弱トテ聚樂乃城の最ミヒ禁裡を守護

の取次と孔子川左近門尉政宗ハ二万余人を引率

と小國兵向リル秀吉云ハ三月八日京都を立て後陣ヨ後き終

は出陣の行旅花火千五百の日を醫の秀吉を立モハ御慶

復ヨ龍波の堀と医し祭事アリテ御ひく英令修リの立方ニギテ人差

シ小船絶へ近習小勝馬やアノ勇士悉く英敏ヨ出立モは輪卓内

大馬印立モは輪卓内

隈伊足太坂よりは出陣を刀に抱せんとて系中へまわら立てみ誰をきべき
開地りに後河の府中より馬移ひ里人を至る薙の宮へ何處よりや
と馬移す室の長壁では宿より五十余金町より桂壁移すとて秀吉
即駕をして詣終より日未だ尊とある社より東夷征伐の
附うれば易て諸侯ひそく活きの驛より移す府小ま川源氏乃程兵
河内八助於鷹十兵傷とて大刀の拳とする者八助八助抱十兵傷
三十、八分の母衣とて通うる小糸を云遙より御邊に後番とてそ乃
如翁同せらる後番初令とて被武者に係近く無付馬とて
太素とて殿トの佐とて云姓名氏名無くとて河内秋成乃
二玉闘とて意となく打手後番刀をく馳つてくと言とて秀
吉下馬とて
名乗れとてくるをとて元御教書とて幕とて
久西陣合戦の勝負よりはれにと詔佛の事とてと下馬せぬ他法か
且ととて今月のとてたるよしとすと今と勝とぞ大指揮とて普通と
る母衣とてけりとて下馬ときと海が身札と區々言せぬと理かとて余
人をみて下馬して回せらるゝれば河内秋成とてく馬より下り満を
姓名知りに宴に勇氣のうるましと諸人とて感とてうる後胡辭
征伐の節被圍の者は母衣にし物を刀とく因を移るじうとて秀
吉とて御主とて御三將の度がをやし宴に坐ししきりうらうとて秀
時より小條左京を委政秀吉を云かだりよく後圓に移りんとひよ
うとれ急ぎ防戦の用意をとて諸士をかて城と守らむ先山
中の城ハ松田を守備くよりこれを守りどりと方勢相まる乃

立勧されども小條在湯門を主兵勝同官を守候る朝倉候登
守と申の城籠を松田が副ねり加へ其扇氏政三人を抜きあら
一腰で先と引せ且三國に向ひやうる者あひゆひく殺事蹟功乃
勇士されば度大半の龍城を攻へべきを考ふ者率て之を攻め
と戰功を勵ましと申れば同官を考む進み多く君必心と覺し
終よりみづて名號ひ急迫よどべ秋番と討院若瑟を報じ
まんと一度の者勇士其勇を嘗嘆に朝倉候登守退く人に告ぐ
小条系の滅亡と遙きにあらずと申の城の要害甚跡にて大
兵あり防ぐべし今氏政内臣人を立て守らしより別居と
棄部と氏勝ぬる討死せば我何を猶うせんや呼呼悼哉と歎ぐ
深小條家也より極氏政の才小條弟謙守氏親として並山の
城を守らせまひ岩棚の城小條委房守氏房が居城うれども氏
房小畠守の籠城修造と丘湯城尾下綱守片桐源左衛門守
門守小岩棚の守らせられ其外伴直相模武秀と附下附上總下總
十ヶ園の城と勇名の猛士と龍城小畠守の後添とほ地大内小條
氏政の子良氏良氏綱守成始めて右河左馬守皆川守城守其外
松田大内守芳賀守義宗守福清遠と山角守本清あ狩村石守守
永守の一族及び七兵の軍兵一万八千余人在畠守の城又猪籠守
守し深とあくはに方一里乃大城より後炮を以と構へ兵糧玉葉
教え猪籠守の隣と行けたる又翁根山に合せと總て又素敷助守
小部守まで七千余人在城址又翁根守を逸向かく構へ廢寺又構へ守
を上方の軍勢翼裏の守をさんひどもだけ切和と何者が城べきと

三室草堂
漫游小治郎
を詠つ
圖



出でて兵多を遣うるの太軍二千余方勝岡の妻ひ岳と勧したば
夷き勢ひよ勢と後よろ経そられをす雄の若き者等とつら
谷を走跡石もみき筋屈を至ニ度三よりけより難むく勢の後(逃出)
聞れりて先後よりましまされが東國勢按より遠ニ支へせば
小田原にて逃げしれど合戦小條の移来より外られてたゞ凡
とくわく刀とみづ

山中城落敗

去後又よ勢翁根の固らと一息よお隠

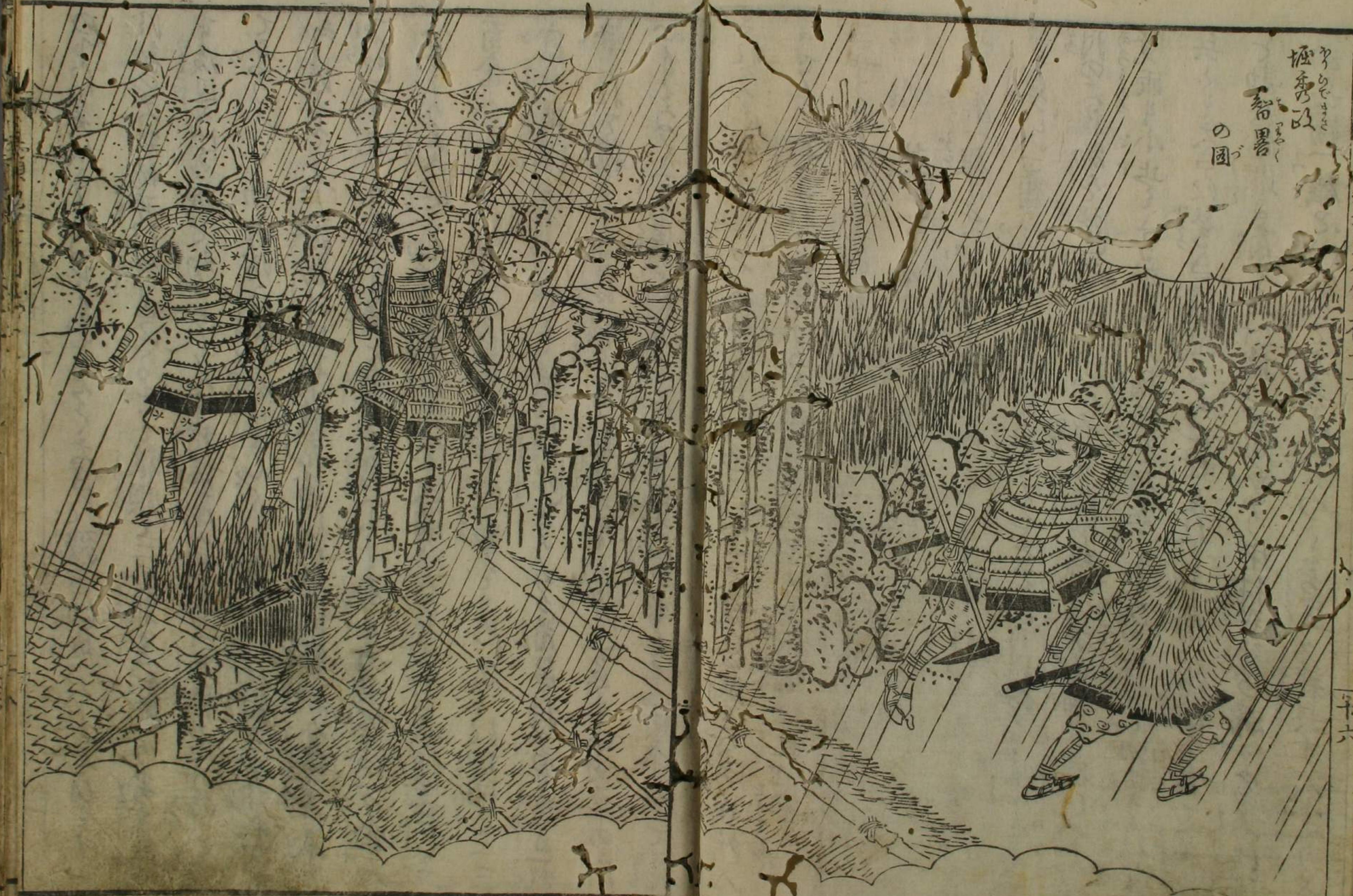
勢の強よ押喜を
秀吉云れて今とトシ猪い先不^トに構うる技倅を妻ひ小田原
と深坂ははて押喜後^ト不^トそ小田原府信確^トと大ねと勝次
小六郎猪^ト後^ト不^トそ細内安八郎蒲生毛利守中河毛馬を度
むの牛の猪^ト松原^ト兵房をま小條^ト猪^ト後^ト不^トそ同官事を前守朝倉
管^ト守^ト同^ト余^ト太軍と幸^トせば大^トの城門をうへどり^トき小
條^ト猪^ト門をま氏勝^ト余^ト一文字に切て此^トの太軍と追^ト久
しめ財を他に手^トと貯^ト家^ト氏勝^ト後^ト士^ト渡^ト際^ト即^ト名
の家^ト只^ト猪^ト生^ト若^トと^ト此^ト苗澤の神^ト羽^ト御^トを是^ト食^トの切^ト刻^ト幣
勇^トで弛^ト走^トあ^トの方^トかね秀^ト勝^トの家^ト士^ト三^ト宅^ト至^ト其^ト風^トの強
を^ト居^ト小田原^ト勝^トの西^ト御^ト車^トの立^ト而^ト衆^ト袖^トと^ト見^ト之^トの

渡辺
勘兵衛
の図



因がけ鬼の手にほりてあり合はるゝ間成りけ私物と見て
城の口さほゝに勢三宅がま龜や勝と人一隊又小
次郎助を突殿經力と抜く首を搔き方の陣まで丁斗引け
る母衣とほゝをうごと後までの心厚にてして母衣と
もみて退き立たる者其勇壯を感歎し三宅は附二十三日秀勝の
兵とお隣の事とやうる秀勝たよろび一番槍といひ地政の首
ゆゑを以教るきも名武と譽めさせり秀吉の本陣へ走りて
止されば市橋下細君と被處に秀吉に至りて首領と記
せ終ふ秀勝がて一番首領軍にいひ三番と記せられと相
ての番より母衣をぬて立つて是始と秀吉に感しと云ふ三宅の
金袋と多くあり秀勝に之を贈め麻の輪糸若干十両を下
しとくと小條氏勝の之後は城の内に羅世が勢を沈入
はせんと探すに城中より弓強炮を雨の如くに亂射が面り而
きゆうかくてその年の年止より其後兩軍中と號て津奉り大風
林と例へ
小條小ちと中村式部が浦一氏がおほよ漫辺勘
義家一雄と智深勇猛の者みづれりけ風雨と夜りに城
中ゑじへ一番當りの名前をさむやどらひ月夜のるるを日本
月の大指物を贈りおほよと登り城と城て三の曲輪又ゑじへ城の
曉雨に小止みとての本指物を拂ふとぞひげ方く切てうれし
兵ども大きに驚き盜賊をうん討ちと十数六箇槍と立て寒末
と勘兵房眼と角とけ城の一番當り中村式部が浦が家人後田
勘兵房一雄と城とた多ふ嘆うてあまう難兵十人余りと

堀秀政
智署
の國



の軍に窓外から平気と云ふ大まく強き後邊一人といひも
ば敵の大勢の中には縫ひ入るをと狼狽て二の郭を入りあらかじめ陣
中後邊づけ方候と知りうとう中村城尾が軍勢二百弱をうち陣と喰
て奪ひ入る勘定房の力合せんぐ又薙立れは討ろく者殺を
知りだよを下す強勁に城ねの條た虎門氏勝向宮朝倉等士卒と
やゆり窓外窓へ出でて散て戰へどもあとの撃軍に万余人
がとうる衆逃さんぐよ表三川山民勝今へ先とまとどい還兵は五
百余人に殺されし中村田中源尾が勢とまじしくに切開き二三
度斗進崩。八十餘人を絶え討死。うちうる翁の中村勇臣一色朝
母とわと獲す而宮朝倉を討死せんと勇じくと小田部の敵
心りくるく一老矣と引き金を死を懼せんと小田部にて後
續々れ是よりと手の勝變よ落邊後邊づくれを有百に
十余中村がるべ二百余級歎トの実後よ後見し秀吉云感慨
えうじて當る弟の名をとく感慨を揚げたる

修蓮殿宗少林小田部

旧に秀吉云大軍と進む湯本の黒見えすよ軍陣と敵、且つ方に
軍陣と敵と敵と敵と構へ長陣の便とほ軍勢とうちて宮
城口湯本口竹浦口等の本城を攻めを進すよ秀吉とて進
の城中除防戦の用意とし定紀と定めて蘿城に秀吉を亦に進
んで小田部の城を十五廿五に之圍と量度物多くへ船へ攻め
と塔中軍を以て繋ぎ川里を走りて舟をあちの軍中

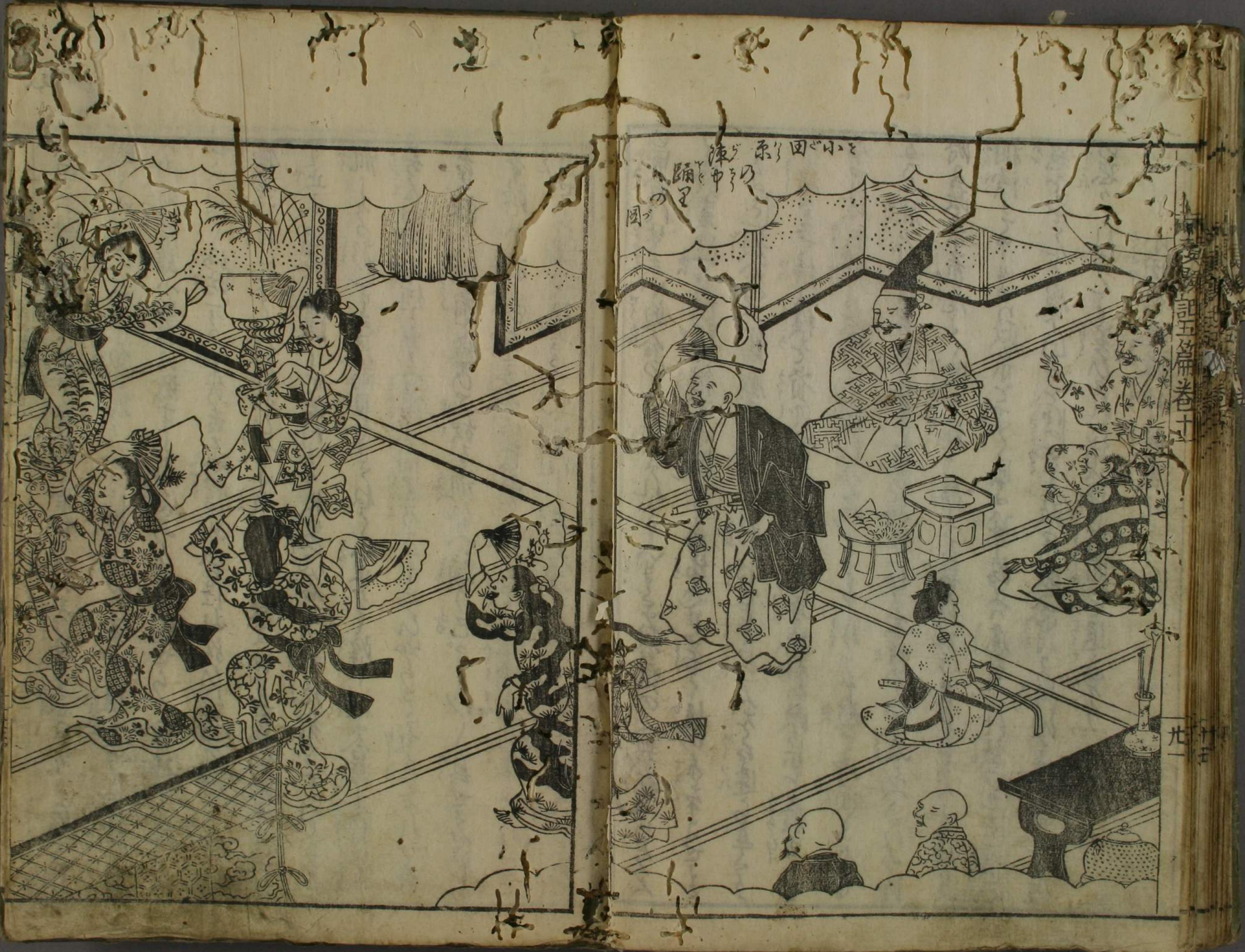
猪を蓬ふの月無事あじはううちの小箱根の信宿蓬送と房廻
軍卒迷惑とうろく小徑在房門營政人全怪至相撞後河邊
に及し牛と多紫佐兵糧を車に積み牛に牽せく運ぶ程
士卒勞せば蓬送甚直是に由て諸國の大名面く牛と求
狼通の如ひとのうれよ秀吉秀若云々極才智と称矣まく馬左
右の近士よ向い冷霄ひ必盜人の走べきに我士卒の馬鞍兵糧と
盜人よ會ひ不すり我自らと向ひて正しき士卒は言どま
て廻者は至候三度と陣中と戻りうる程に他の陣り多く盜
又深ども秀政が陣にい盜人曾て入ず餘り灰毛り秀若の御
又達殺し廻者を殺す多極アハハハハハハハハハハハハハ
太守は達を承ま政宗秀若の威れよ賤よ遙く奥乃をみて誠後
を纏甲斐をとぎ箱根より來去乃幕内屬せんと乞ひ附上
方の諸ぬ皆心よびひるべ民政を乞ひんより難きよあひ小田原漏て
後ひ元奥乃の代かくべ奥羽へ國遠く兵多く容易に難
也」と兼くそひがし」と不寄り政宗軍門に奉りて幕下さん
さ隆」ウバコノ間出度き御り故とほんで秀若云々ゆくとやと乍れた
秀若云ひの外政宗もほ系を據り人をして政宗をせらば
と夜彦勝佐竹義重等率て皆駆けを馳て我軍勞と訪ひ我軍
退の意ひが今叶は不寄りほし民政けに諸墨端の小田原
城に文書をとまく號て我幕下とよとぞむ其事と

公
政宗
源
中
乃
刀
団



敵勢はとどく事無きを過りて勝ててあらず。敵も之より地を拂はず。バ
松原と表く遙か宋江三十万石を以て我旗下へて是と免ん給ひ
んがよく國ゆゑて合戦の用意をさせよ。汝が會はば若んじて小軍と
騎減り走し馬と汝が國又進ふ。やうやくまほび殿示讐で善く
も承りまよあつて、案の諸ど配兵と之とを令に付せすはれろを
院や都邑よ移ひといひそぞ遠背付き遼に会津に在るの地名とす。
はシヤムノナルべ秀吉を宣示して、ひとづ細これに明日對面と敵す
ぐ」と宣へ。政宗長く母が附を望朝殿下孔雀織の陣羽織と、
號九尾と號く。彼を受取るが政宗謹て辭謝。却て之を麻殿
を宣示遼との奉者北条と我陣營と見せん様の上登り。と先
手を歩み、後へ政宗後を追ひて、ひとづ秀吉を宣ひ。汝が國
の國會す。三小道合の事。而しては六まと合戦の人衆配付をす。と
タゞて、嘗て御内侍理。彼の陣へて、汝を首に見立て、後のみをまよひと
て、ひとづ數次。而て附殿下政宗は力とおや事を口へて、人を速らし
て、行はれて終の後を首に定て、奥の大守強の政宗と義忠と
を殺ぬ。而て政宗は只恐れ、ひとづりて放て、汗面と見え
る。ひとづりて勇ある人の大義を感の如しも、又世の人及びて、さへあた
附殿下首尾と眼を擣りて、奥のゆゑにうちをとて、刀と槍の如
相濟て、やうやく政宗とよく國ゆゑ。多ひ魔をからて放つて、と彼が
遙とさんと撃下しゆ。とほとほと政宗我と背が附門に達成せんよ。何
の惡うをしたと宣ひ。されば諸君皆殺すて退き。

小山居之譯中昇稿



山東射陣中堅く守りて合戦を怠らずに攻
略し又自の軍中より方の軍中淮と力を因陵す
内府信雄小田原乃城中と内通ありて裏切せらるゝき跡と陣をひ
そぞくは既に秀吉の性に反して淮に信雄の陣を走り酒
飲酒過り心下くおびひよしと爲ふと淮中の風流
止く諸軍安堵してもがまぬ實に名の行徳をこそと見を
視るゝ陣中何とかお体安四里乃至の小止く陣酒を食す
あるの陣中何とかお体安四里乃至の小止く陣酒を食す
至陣の酒肴と燭ひ又飲を視ひ入へ踊り己が身を殊ひ
至陣の水三の壺玉半の茶全を飾て已法橋毛利体安に當と
與せしめ諸君が集らて宴と酒一年春まむ度を平人手の物と見せ
小手と酒ひ出で長陣の男をりゆれんる櫻旗下見をうまい
女と立ておれとくと面らむと呼て毛利金高を胸を打
面をうなづけおれとぞうて踊酒とあれ一席すき度ア興
よひや限りは恭波まへと毛利備と毛利妻とくどんどうくどんく
金とどうくから金と湯がたぎりたゞとやにして視ひしがざると
娘とみせ濃煙のね士絶例一軍中の熱を失ふ

